



## 実行委員会だより

第 19 号 平成 22 年 8 月 30 日発行  
記念事業実行委員会

### ○ 頸城妙高の不易流行

校長

不易流行：いつまでも変わらないこと、と変わりゆくもの。  
時代によって、変化する姿(流行)と変わることのない感動(不易)  
(芭蕉の俳諧用語)不易は詩の基本である永遠性。流行はその時々  
の新風の体。共に風雅の誠から出るものであるから、根本において  
は一であるという。(広辞苑)

夏休みの間に、近隣の新井小学校新校舎が次第に当初のデザイン画のとおり姿を現してきた。いずれ本校の何人かの諸君が、そして多くの同窓の諸兄が学んだであろう現校舎も取り壊されるときが来る。

列車通学の諸君が脇野田駅で毎日眺めてきた仮称北陸新幹線の新駅基礎工事もほぼ完了し、板倉の山すそから延びて、中田原の高田商業のグラウンドをかすめて高田トンネルに続くガードもほぼ繋がろうとしている。

先日、県下の地理担当の先生方の研究会に同伴して、新駅のホーム建設予定現場に登らせていただいた。



脇野田駅

新駅ホーム予定場所



建設工事ほぼ完了、片付作業の様子



いずれ線路が敷設され、ホームができ階段エスカレーターも設置され素晴らしい新幹線新駅駅舎が完成するわけだ。この広大な駅舎の真下に脇野田駅と信越線レールが移設されると付近は駅前広場となる予定と聞いている。

そして、諸君が通う信越線区間は JR から地元自治体出資の第 3 セクターに移管され、その後も一応引き続き列車は走ることにはなっている。勿論諸君の大事な通

学の足、いつまでも走り続けてもらいたいが、ともすれば妙高高原駅から先、信濃町長野まで線路が途切れてしまう可能性も有り得る。

現在ほぼ 100 名の諸君が通学に利用しているその妙高高原駅までの風景を、この



新井駅

夏、垣間見てみた。新井駅を出発すると直ぐに、その昔 SL が黒煙をあげて上って行ったという勾配を、各駅停車「妙高号」がかなり前の旧特急車輛の車体を軋ませながら上っていく。

妙高高原に向かう急勾配の途中に位置する二本木駅はスイッチバックのホーム。徐々にスピードを落とした列車がホームも何もないところで停車し、バックし始める。果たしてどこへ、と多少不安に思っていると二本木のホームに。子どものころ、夏休みに二本木に住んでいた従兄弟のところに遊びに行ったことがある。高田に比べて随分涼しかったことを思い出す。



二本木駅

駅構内

二本木駅を出発、ちゃんと線路を間違わずに次の関山駅にむかう。関山駅の手前、錆びついたレールが合流する。勿論その先には以前の関山駅ホームがあった。二本木駅と同様スイッチバックだった旧駅。架線とレールは撤去され、生い茂る草むらの中、ホームと駅名も判読できないほどにさび付いた看板がひっそりと佇んでいた。



旧関山駅に延びる錆びたレール



旧関山駅風景



関山駅を出発し、列車は関川を眼窩にして谷間に沿って妙高高原駅に向かう。  
 一明治19年、関山から長野までの鉄道敷設で最大の難工事といわれた大田切築堤工



「大田切工事碑」

事、この工事で亡くなった79人を慰霊する「大田切工事碑」が、大田切川近くの妙高市坂口新田のJR信越本線脇にぽつんとたっている。  
 (新潟日報平成21年5月17日「碑は語る」から)

その石碑も走る車内からはあっという間に通過してしまった。

妙高高原駅に到着。スキーブームの頃のあの駅前の賑わいが去り、静かな夏の午後。合宿帰りの学生と思しき姿が二、三人。下り直江津行き到着まで20分ほど待った。



妙高高原駅



“春を愛する人は 心清き人…”で始まる『四季の歌』、この歌の作詞作曲をした荒木とよひさ氏にまつわる次の記事を読んだ。

一母が離婚して東京に店を持って忙しい日々を送っていた。かまってもらえない荒木少年は冬になると、新潟関温泉の知人宅で過ごした。大学受験もここから行った彼にはここがふるさとだった。日大芸術学部に入ると、映画を学びながら、スキー部で競技スキーに打ち込んだ。大学2年の春、合宿のオフに、モーグルの開脚ジャンプをして転倒、脚を複雑骨折し、旧高田の病院に入院。都下に転院、回復まで3年近くかかった。その間、ギターを手放さなかった。大けがでスキー選手の夢も映画監督の道も閉ざされた。自分を慰めるように「四季の歌」をつくった。思い浮かべたのは、関温泉から見える神無山や妙高山の山並み。長い入院生活の中で看護師らにこの歌を教えると、口伝えで広まった。

「四季の歌」の後、荒木さんはバンド活動やCM作詞などを経てプロの作詞家になる。森昌子さんの「哀しみ本線日本海」、テレサ・テンさんの「つぐない」などヒット曲も多い。  
 (朝日新聞 平成21年7月4日「うたの旅人」から)

春を愛する人は 心清き人  
 すみれの花のような 僕の友だち

秋を愛する人は 心深きひと  
 愛を語るハイネのような 僕の恋人

夏を愛する人は 心強き人  
 岩をくだく波のような 僕の父親

冬を愛する人は 心広き人  
 雪をとかす大地のような 僕の母親

うきぎ 兎追ひしかの山 小ぶな 小鮒釣りしかの川 夢は今もめぐりて 忘れがたきふるさと 故郷  
 いか 如何にいます父母 つつが 恙なしや友がき 雨に風につけても 思ひいづるふるさと 故郷  
 こころざし 志をはたして いつの日にか帰らん 山はあをきふるさと 故郷 水は清きふるさと 故郷

唱歌「故郷」 高野辰之作詞、岡野貞一作曲

「故郷」は文部省小学校唱歌教科書編集委員だった高野辰之が作詞し、同じく編集委員だった岡野貞一が作曲した。1914(大正3)年6月発行の「尋常小学唱歌」第6学年用の教材として掲載された。現在も小学校6年の共通教材となっている。

(朝日新聞 平成21年10月24日「うたの旅人」から)

小学校の共通教材ということだから、生徒諸君も初めて聞く歌詞ではないのだろうと思い、話題は信越のやまなみを越えてしまうが、触れてみた。実はこの歌の中の風景が、遠くではなく意外と近いところにあることを知っているだろうか。

本校野球場ホームベースから妙高山を望み、左に続く信州の山々。黒姫、飯綱、戸隠に斑尾を加えて北信五岳と呼ぶそう。その斑尾の向こう側、北信州飯山近くの永江村、現在の中野市永江町、高速豊田飯山インターの近くの山や川がこの歌の主人公。

—JR飯山線替佐駅から車で15分ほど走った山中に、高野の生家がある。そこから5分歩くと「ふるさと橋」、北を見ると大平山と大持山がそびえる。これが“かの山”。橋のそばの真宝寺の脇に小川が流れる。斑川だ。これが“かの川”だ。幅3メートルほどの清流で、千曲川に注ぐ。

記念館には「故郷」のほか「春が来た」「春の小川」「朧月夜」「紅葉」などの楽譜が並ぶ。これらすべて高野辰之作詞、岡野貞一作曲だ。

(朝日新聞 平成21年10月24日「うたの旅人」から)

“これが日本の原風景だ”と見出しが述べている。確かに、自分の世代の人間にとっては…。

“若き生徒諸君にとっては如何に？ 不易なるものか、それとも時代の変化で既に遠くへ行ってしまったものか？”

一方では巨大なコンクリートの橋脚が、田を横切り、山を貫いて延々と続こうとし、また一方では錆び付いたレールが、草いきれの中放置されている風景が見える。

そうした風景を眼下に、今年も妙高市が主管する「信越五岳トレイルランニングレース」が来月19日、20日に開催されるということだ。故郷の山々、その“美しい山容を彩る四季の風景は、長い時の流れをおだやかに受けとめて、見上げる人々の心に大いなる安らぎを(大会パンフから)”いつまでも与え続けてくれることだろう。

